

[研究区分：学際的・先端的研究 (A)]

研究テーマ： 日独保健医療福祉専門家養成教育カリキュラムの比較研究 —社会福祉教育を中心に—	
研究代表者： 保健福祉学部 人間福祉学科 教授・三原博光	連絡先： mihara@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者： 教授・住居広士， 准教授・国定美香	
【研究概要】	
研究の背景 ドイツのソーシャルワーク教育課程は、20世紀の初めにドイツ全土の各地で始まった。当時は、大学の教育課程としてではなく、社会福祉の実践現場からの施設や機関の養成と再への教育の要望に応えるために、1年ないし2年間の養成過程として出発した。そのため、ドイツのソーシャルワーカーの教育養成は、民間の社会福祉事業団のディアコニー福祉団体（プロテスタント系）などの民間社会福祉団体が経営する社会福祉の単科大学、ならびに専修学校で行われてきた。21世紀に入り、現在、ドイツのソーシャルワーカー養成教育は、3年制課程で総合大学の一部と専門単科大学をあわせると約89の大学機関で行われ、毎年8000人の学生がその課程を修了し、様々な社会福祉領域で働いている。	
研究目的 ドイツの大学においてソーシャルワーカーを目指す学生への質問紙調査を通して、福祉意識の把握にある。	
研究の方法 県立広島大学と国際学術交流協定校であるNRWカトリック大学でソーシャルワークを学ぶ学生を対象に、福祉意識を調べるために質問紙法調査を実施した。調査項目は、①職業選択の動機、②大学での学習生活、③ソーシャルワーカーの社会的評価、④海外の社会福祉への関心、⑤ドイツ国内での社会的問題、に分類され、自由記述も含め19の質問項目であった。調査期間は、2012年10月～2013年3月までであった。	
調査結果 132名の学生から回答を得た。性別では、8割の学生は女性であった。年齢については、学生の6割が25歳までであった。学年は9割が1年生と2年生であった	
(1) 職業選択の理由 「他の人を助けたい」「福祉の仕事に興味がある」「資格が魅力的」の回答の割合が高かった。「給与が良い」という回答は低かった。	
(2) 大学での学習生活 ① 学生生活に満足しているか 「満足している」127名(96.2%)、「満足していない」4名(3.0%)となり、9割強の学生が学生生活に満足していた。 ② 実習時間が十分とられていると思うか 「思う」が95名(82.0%)、「思わない」25名(18.0%)となり、8割の学生が実習時間は十分とられていると感じていた。 ③ ソーシャルワーカーの仕事を生涯続けたいか 「思う」122名(92.4%)、「思わない」8名(6%)となり、9割の学生が生涯、ソーシャルワークの仕事を希望していた。	
(3) ソーシャルワークの社会的評価 ① ソーシャルワーカーが得る報酬(給与)は十分だと思うか 「思う」8名(6.1%)、「思わない」122名(92.4%)となり、ソーシャルワーカーの報酬が十分であると感じている学生はわずかであった。	

② ソーシャルワークの仕事を通して自分自身が成長できると思うか

「思う」128名(98.4%)、「思わない」2名(1.6%)であった。9割強の学生がソーシャルワークの仕事を通して、自分自身が成長できると考えていた。

(4) 海外の社会福祉への関心

① 海外に行ったことがあるか

「ある」122名(92.4%)、「ない」8名(6.1%)となり、9割の学生が、海外に行ったことがあると回答していた。

② 海外の社会福祉施設で実習してみたいと思うか

「思う」55名(39.4%)、「思わない」77名(58.4%)となった。半数の学生が海外の社会福祉施設の実習に関心を示さなかった。

考察

ソーシャルワークの職業を目指した動機では「他の人を助けたい」「福祉の仕事に興味がある」「資格が魅力的」の割合が高かった。「他の人を助けたい」という動機は、ドイツの文化であるキリスト教の隣人愛の理念が学生の動機づけに影響を及ぼしていると考えられる。

大学での学生生活のなかで、ほとんどの学生が大学での生活や実習に満足していた。特にドイツの実習では、大学入学後1年間以内に実習Ⅰ段階として、15日間の実習が課せられている。2年生になると実習Ⅱ段階として30日間の実習が夏休みの間に課せられ、卒業までに94日間の実習が課せられている。実習のなかで、外国の社会福祉施設での実習も単位として認められている。大学における積極的な実習と海外の福祉施設における実習が単位として認める取り組みが学生の实習時間が十分に取られているという回答結果の要因となっていると考えられる。

ソーシャルワークの社会的評価のなかで、ソーシャルワークの収入に関して、「収入が良い」と考えていない学生が9割存在し、ドイツのソーシャルワーカーの収入は必ずしも高いと言えないと思われる。しかしながら、ソーシャルワークの仕事を通しての自己の成長に関しては、9割以上の学生が「ある」と回答をし、ドイツの学生の自己の成長に対する強い自意識が見られた。そして、やはり9割以上が、ソーシャルワークの仕事を生涯、続けて行くと回答をしており、ドイツでソーシャルワークを学ぶ学生は、ソーシャルワークの仕事に誇りを持っていると言えよう。

ドイツの学生の9割は海外に行ったことがあると回答していた。この回答結果には、ドイツがヨーロッパ諸国のなかに位置し、容易に他の国の旅行等で行けることが回答結果に影響していると言えよう。ただ、「海外の社会福祉施設で実習してみたい」との回答は約4割であり、他の設問の回答結果と比較して、必ずしも高くはなかった。これは、ドイツの学生が容易に他の国々を訪問できるので、敢えて海外の国々で実習をしたいという気持ちを持たないのではないかという要因が考えられる。

本調査をわが国の社会福祉士養成教育のなかで反映するとなれば、ドイツの学生達が大学の実習時間に満足している結果を重視し、その取り組みをわが国の社会福祉養成教育のなかに取り入れて行くべきではないかと思われる。それは、国際的視野を身に付けることを目的とした国際実習、長期間の実習を通して、実践能力を身に付ける養成教育である。特に実習を通して得られる実践的知識、実践的技術が現場の利用者に反映されるとき、その実践が福祉の実践モデルとして採用される可能性が高くなると言えよう。

結論

ドイツのソーシャルワークを学ぶ学生達は、「他の人を助けたい」「資格が魅力的である」などの動機づけを持ち、ソーシャルワーカーの収入は低いと感じながらも、ソーシャルワークの仕事を通して自己成長できると考えていた。

[研究区分：学際的・先端的研究 (A)]

[研究区分：学際的・先端的研究 (A)]
